

「学力」とは、何だろうか？ 全国学力テスト「1位」、秋田を訪ねる。

「秋田に学べ」

昨年、最初の全国学力テストの結果が発表された直後、首都圏の電車に進学塾・Eゼミナールの広告が出た。「秋田に学べ」。

全国学力テストの目的は、課題を分析して今後の改善や教育条件整備に生かすことだったはずである。



しかし、新聞各紙の一面を飾ったのは懸念したとおり、都道府県別順位の一覧表だった。そして「1位」だった秋田は、早速脚光をあびることとなる。

秋田自身にとっても、実は「予想外」だったという。受験競争が過熱する都市圏ではなく、ごく一般的な教育を進めてきた農村県が「1位」だったからである。「なぜ？」といわれても、他県と違う特筆すべき対策を行ってきたわけではない。

その後、学力テストの成績公表をめぐる橋下徹大阪府知事の「クソ教委」発言を契機に、「成績」や「順位」のひとり歩きはますます加熱しつつある。

いまや鳥取や秋田をはじめ、全国で政治家主導の「成績公表論」や「競争万能論」が吹き荒れている。茅ヶ崎や藤沢も例外ではない。

しかし、そこには「『学力』とは何か」の本質論議や、どのような教育条件整備が必要かといった冷静な論議は見られない。

そもそも「結果を公表して競争させれば『学力』は伸びる」という単純なものなのだろうか？

本来、「点数」や「順位」で学校や地域を見ることに、私は抵抗がある。しかし、これらの論点の検証のため、今回私はあえて秋田を訪れてみることにした。

「学力低下」の実態は

その前に、イメージの先行する「学力低下」なるものの実態を、冷静に把握しておく必要がある。

「学力低下」論争のひとつの転機は、OECDが実施した「国際学力比較調査(PISA)」である。

この調査内容はかなり多岐にわたるものだが、日本ではその一部だけをとらえて「学力低下」が過剰に報道される一方、内容の分析はほとんどかえりみられなかったといっている。

PISAが指摘したのは、つぎのような内容である。

日本の高校生の学力は、全体としては依然として世界の「トップグループ」にある。

知識・理解については大きな変化はないが、応用力については有意な低下がみられる。

日本では学力が「上位グループ」と「下位グループ」に二極化する傾向が見られる。

そして、特に「下位グループ」が学習意欲を喪失している傾向があることが、全体として平均点を押し下げる結果となっている。

この「学力の二極化」と、いやな言い方だが「『下位グループ』の学習意欲の喪失」は、多くの調査の結果からも確認されている。

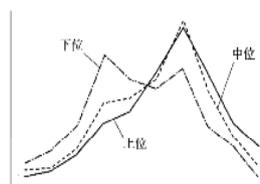
では、このような「学力の二極化」はどこから生まれてくるのだろうか。

もしそれが個人の努力の結果だというのなら、「競争」を導入すればよいという主張もありうるだろう。

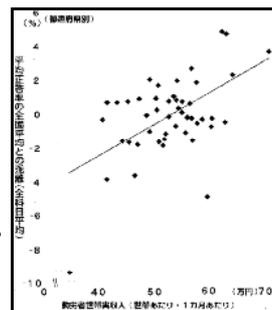
しかし、さまざまな調査の結果はいずれも、「『二極化』の原因は経済格差に負うところが大きい」という結論を導き出している。

一例として、連合の発行する「連合白書」の調査をあげる。このデータからも、世帯収入と学力テストの正答率に有意な相関関係を読み取れる。

この立場に立てば、必要な対策は「競争」ではなく、少人数学級や奨学金の充実、教職員の増員などの教育条件整備だということになる。



学力の「二極化」



▲経済力と学力の相関

秋田県H村・H中学校を訪ねる

秋田県の寺田典城知事は、今年に入ってから学力テストの結果公表を主張し始めた。そしてあることが、「県内でトップだったのはH中学校」と一方的に「発表」してしまったのである。

では、このH中学校とはどんな学校なのだろう。

秋田市から奥羽本線で一時間半、そこからさらにバスで山中に入ったところに、H村という人口3千人ほどの小さな村がある。高齢化率は30%を越え、農業以外にはこれといった産業のない、しかし一面の緑に包まれた静かな村である。

この村に1校だけあるのが、H村立H中学校である。全校生徒58人。そのうち、3年生は18人である。

私が訪ねたとき、学校ではちょうど帰りのホームルームが終わろうとしていた。生徒たちはみな明るく挨拶をしてくれる。



あくまで、のどかな「普通」 ▲総合学習の授業風景の中学校である。茶髪の子、いないしなァ。

お忙しい中を、先生たちと話をさせていただいた。

竹村： H中学校では、どんな実践をされたのですか。

H中： 特別なことをしたわけではないんです

ただ、授業がわからずにつまづく子を出さないよう、生徒ひとり一人にきめ細かい指導をこころがけてきました。私たち教師も、授業改善にいっしょうけんめいと取り組みました。

竹村： あの、テスト勉強でバリバリ「競争」させたとか、学校選択制とか、塾通いとかが

H中： 村にはそんなものありません（笑）。

良い条件が重なったことはあるでしょうが、普通のことを普通にただけなんです。

知事さんの発言以来、マスコミの方もよく取材に見えるんですが、どなたも特に報道することがなくて困って帰られるんです。

竹村： 学校の雰囲気、ゆったりしていますね。

H中： ありがとうございます。この学校は、先生も生徒もみな仲がいいんです。勉強がわからない子がいても、クラスのみんなで教え合います。村の人たちも、皆で支えてくださいます。

この学校では、時間がゆっくり流れているんですよ。

H中学校に続く道の両側には一面に花が咲き誇っていた。「生徒たちが総合学習の時間にみんなで植えたんです」と、先生が話してくれた。

時間がゆっくり流れている 私もそう思った。これは、本来の「ゆとり教育」そのままではないか。

H中学校の先生たちの視点は「できる子」づくりではなかった。「授業がわからずに困っている子」を出さないようにするための、ていねいな指導である。

もちろん、授業改善には教職員全体で力を注いだという。その努力が功を奏したことも大きいだろう。

「生徒たちはみな『授業が楽しい』とってくれるんです。」と、H中学校の先生は話してくれた。

この結果、OECDの分析を借りれば、いわゆる「学習意欲を喪失している下位グループ」が減少し、「平均点」が上昇することとなったのだ。

もし「H中に学ぶ」ことがあるなら、「教育とは地道なとりくみの蓄積」というあたりまえの結論なのだ。

「第1位」は秋田に何をもたらしたか

正直に言って私は秋田に行くまで、秋田の教育に対して少々斜めに構えていた。しかし秋田の教育は、もしかしたら受験と生徒指導に揺れる神奈川など都市部の教育より、ずっと「普通」なのかもしれない。

秋田県教育委員会が全国学力テスト「1位」の原因として分析しているのは、「全国に先駆けた30人学級」「授業改善」「学校・家庭・地域の連携」である。その「基本」を、より丁寧にとりくんだということだ。

高い「平均点」を生んだもうひとつの要因は、「二極化」が比較的少ないことだろう。

Eゼミナールには皮肉なことに、秋田では「下位グループ」も少ないが「上位グループ」も少ない。このような指標は好まないが、秋田の大学入試センター試験の昨年の成績は全国39位である。

おそらく「成績上位グループ」に限っていえば、大阪府の方が秋田よりはるかに上を行くだろう。

「平均点」とは、そのようなものなのである。これを単純比較して騒ぎ立てることに、どんな意味があるのだろうか。

まして、「競争させれば学力が向上する」などという単純なものではない。過度の競争はむしろ学習意欲を喪失する生徒を生み、「平均点」はかえって低下する可能性があるのである。

残念なことに、「全国学テ1位」は秋田の教育に弊害も生み始めている。寺田知事は、結局学力テストの結果公表を多くの反対を押し切って強行してしまった。

また、「この先、順位を落とせない」というプレッシャーも大きく、過去問題や類似問題を使った学テの事前練習が秋田ではあたりまえになりつつあるという。

H中学校のあの素朴な生徒たちが、これからも「順位」や「点数」に振り回されることなく、まっすぐに育ってくれることを願わずにいられない。